耳前部皮下に生じた石灰化上皮腫の1例

西川 恵子・西川 益利*・石黒 公雄**

A Case of Calcifying Epithelioma in the Preauricular Region

Keiko Nishikawa, Masutoshi Nishikawa and Kimio Isiglo
(Syuto General Hospital)

An 8-year-old girl complained of a firm tumor in the right preauricular region. The tumor was treated by excision. Histopathological examination revealed calcifying epithelioma. Previous reports of calcifying epithelioma are reviewed.

Key words: calcifying epithelioma, Malherbe's tumor, preauricular region

緒 言

石灰化上皮腫は Malherbe¹⁾ が1880年に報告した良性腫瘍で、主として皮膚科領域で報告され、耳鼻科領域での報告は少ない。我々は、最近本症を一例経験したので若干の考察を加えて報告する。

症 例

患 者：8歳 女児

初 診：昭和59年4月9日

主 訴：右耳前部腫瘍

家族歴および既往歴：特記すべきことなし

現病歴：約1年前より右耳前部に腫瘍があるのに気付いていた。半年前近医受診し、当科受診を勧められていたが、痛みも無いので放置していた。しかし最近になり心配になってきたので当科受診した。

現 症：体格、栄養とも良好で、全身的には異常を認めない。局所所見は図1の如くで、右耳前部に約4×3cm大の表面凹凸のある境界明

瞭な可動性のある硬い腫瘍を触知した。

X線所見：後頭前頭位撮影で右頬部外側に淡い陰影増強を認めた。CT-scan にて右頬部皮下に high density area を認めた(図2)。

臨床検査所見：末梢血検査、血清生化学検査、尿検査等特に異常所見は認めなかった。

治療および経過：全麻下に腫瘍を摘出した。腫瘍は皮下脂肪組織内にあり、容易に剝離摘出できた。耳下腺組織との癒着は認めなかった。昭和60年5月現在再発をみない。

摘出物所見：腫瘍の大きさは約3.5×2.5cmで、黄白色で硬く表面凹凸不整であった。また表面を薄い線維性被膜組織で被われていた。剖面は黄白色で、全体的に粗大顆粒状の石灰沈着が認められた。

病理組織学的所見(図4, 5)：硝子化結合組織中に shadow cell より成る nest が散在し、著明な石灰沈着を伴っていた。basophilic cell や異物型巨細胞は見出し得なかった。

*山口県厚生連周東総合病院耳鼻咽喉科

**山口県厚生連周東総合病院研究検査科

図1 局所所見 右耳前部皮膚に凹凸不整を認める

図2 CT像 右頬部皮下に high density area を認める

図3 摘出物所見 表面凹凸不整で薄い線維性被膜組織で被われている

考 察

石灰化上皮腫 (Calcifying epithelioma) は, 1880年 Malherbe¹⁾ により最初に報告された. それ以後, 本症は Calcifying epithelioma の名称の他, Malherbe's tumor, pilo-

図4 病理組織所見 H. E.

図5 病理組織所見 H. E.

表1 石灰化上皮腫の報告例

症例	報告者	(年度)	年齢	性	発生部位	治療
1	長倉 ⁸⁾	(1968)	17y	女	頸部	摘出
2	三宅 ⁹⁾	(1970)	3y	女	耳介前部	"
3	荒木 ⁴⁾	(1973)	1y	男	耳介前部	"
4	東 ⁵⁾	(1975)	14y	女	耳下部	"
5	東 ⁵⁾	(1975)	10M	男	耳後部	"
6	朝隈 ¹⁰⁾	(1976)	16y	女	耳前部	"
7	河合 ¹¹⁾	(1977)	30y	男	頸部	"
8	土田 ¹²⁾	(1985)	14y	女	耳下部	"
9	後藤 ¹³⁾	(1985)	12y	女	耳前部	"
10	自験例	(1985)	8y	女	耳前部	"

matrixoma, trichomatrixoma, pilomatricoma などの名称も用いられている²⁾。

本症の発生年齢は、20才代に最も多く、次いで10才代、10才未満の順とされる³⁾。男女差はない⁴⁾⁵⁾かもしくは、女性に多い⁶⁾⁷⁾とされるが、耳鼻科領域の報告例では女性に多い。発生部位は、上肢、顔面に好発し、体幹、頭部、下肢には少ない³⁾。顔面では耳前部に多いとされる⁶⁾が、頭頸部をあつかう耳鼻科領域での報告は少なく、我々の渉猟し得た報告例は表1の如くであった。山際⁶⁾は、三重県下の10年間における生検および切除標本の約50,000例のうち55例が石灰化上皮腫であり、そのうち35例は頭頸部領域であったことを報告している。このことから推察すると、朝隈¹⁰⁾、河合¹¹⁾も考察しているように、頭頸部をあつかう耳鼻科においても、本症は報告されないだけで、実際にはかなりの症例が経験されているのではないかと思われる。

本症は、毛母細胞由来の上皮腫と考えられている。その発生要因は十分解明されてはいないが、epidermal cyst のような表皮の真皮への迷入課程が必要なものと、単なる毛嚢細胞の増生によるものとに大別される。山際は耳瘻との関係にも注目している。組織学的に腫瘍細胞は基底細胞に類似し、好塩基性の胞体を有する好塩基細胞 basophilic cell とその壊死細胞の陰影細胞 shadow cell より成り、本症の特徴である石灰化は、後者に沈着する。Turhan and Krainer によれば、basophilic cell は hair matrix cell, shadow cell は immature hair cortex cell に相当すると云う¹⁴⁾。

治療は外科的に摘出すれば良く、ほとんどの報告例において摘出がなされており、再発は認めない。また悪性化をきたすことも無いとされる。

結 語

8才女兒の耳前部に発生した石灰化上皮腫の1例を経験したので報告した。あわせて本邦における耳鼻科領域での報告につき検討した。

参考文献

- 1) Malherbe A, et al : Note sur l'épithéliome calcifié des glandes sebacées. Progr Méd de Paris 8 : 826~828, 1880. 15) より引用
- 2) 後藤浩司, 他 : 左耳前部に生じた石灰化上皮腫の症例. 日口外誌 29 : 969~974, 1983.
- 3) 北村包彦, 他 : 臨床皮膚科全書 4 巻. 79~81頁, 金原出版, 東京, 1969.
- 4) 荒木昭夫, 他 : 乳児の耳介より発生した石灰化上皮腫 (Malherbe's Tumor) の1例. 耳喉 45 : 523~525, 1973.
- 5) 東絃一郎, 他 : 石灰化上皮腫 (calcifying epithelioma) —その臨床と病理—. 耳喉 47 : 385~387, 1975.
- 6) 山際裕史 : 石灰化上皮腫の病理 (三重大学の経験). 臨床病理 28 : 928~931, 1980.
- 7) Herhrnández-Pérez E, et al : Pilomatricoma (Calcifying Epithelioma) A study of 100 cases in El Salvador. Int J Dermatol (US) 20 : 491~494, 1981.
- 8) 長倉政行 : 頸部腫瘍の2例. 日耳鼻 71 : 1805, 1968.
- 9) 三宅 弘, 他 : 耳前部に発生を見た Calcifying epithelioma の症例について. 日耳鼻 74 : 808~809, 1970.
- 10) 朝隈真一郎, 他 : 耳前部に発生した大きな石灰化上皮腫. 耳鼻 22 : 399~404, 1976.
- 11) 河合清隆, 他 : 頸部に発生した石灰化上皮腫の1例. 耳展 20 : 837~840, 1977.
- 12) 土田みね子, 他 : 耳下腺およびその周囲の石灰化を伴う病変について. 耳喉 57 : 159~162, 1985.
- 13) 後藤治典, 他 : 頬部に発生した石灰化上皮腫 Calcifying epithelioma. 耳喉 57 : 268~269, 1985.
- 14) Lever and Schaumburg-Lever : Histopathology of the skin, 5th edition JB Lippincott Company. pp 518~520, Philadelphia, Toronto, 1975.

原稿到着 : 昭和60年 6月13日

別刷請求先 : 西川恵子

〒742 山口県柳井市大字古開作1000番地の1

周東総合病院耳鼻咽喉科